

レストランのポックル」の最新刊だ。

それを読むみっくんの顔には、とてもわくわくした表情が浮かんでいた。いつもの不機嫌そうな顔とは違う、昔となんにも変わらない、おもしろい童話を読んでいるときのみっくんの顔だ。

驚きすぎて声をかけることもできないでいると、みっくんがふいにわたしに気がついた。みっくんはぎよつとした顔になってから、すぐにその表情を引っこめて、「なんだ、高梨か」といつもの声で言った。そして読んでいた本を棚にもどすと、なにごともしなかったかのように、すたすたとその場を立ち去ってしまう。

わたしはあつけにとられてしまっただけから、とつさにポックルの最新刊を棚から取って、あたふたとみっくんのあとを追いかけた。

「道橋くん、待って！」

わたしと呼びかけても、みっくんは立ち止まってくれなかった。わたしは駆け足でみっくに追いつくと、服のすそをつかんで言った。

「待ってよ、みっくん！」

昔のあだ名をつい使ってしまうと、みっくんが怒った顔で振りかえった。鋭い目でにらまれて、わたしはびくっとうつむいた。

けれどそれからすぐに、大きなため息が聞こえて、わたしがおそろおそろ顔をあげる、みっくんは怖い顔をやめて、あきれたようにわたしのことを見ていた。

「もうその呼びかたするなよ。恥ずかしいだろ」

「ごめんなさい。その、これ、借りようとしてたんじゃないの？」

わたしはおずおずとポックルの本をみっくに差し出した。けれどみっくんはその本を見もしないでこたえる。

「借りないよ。このまえ高梨が話してたのを思い出して、ちよつと見てただけ」

「でも、すぐわくわくした顔で読んでたし……」

「そんな顔してない」

怖い声できっぱりかえされて、わたしはまた縮こまった。それでもわたしがまだもわくわくしたし、ポックルがつくるいろんなマーボー豆腐がどれもおいしそうだ……」

わたしはしどろもどろに、ポックルの新しいお話のおもしろさをみっくに伝えようとした。

そんなわたしのことを、みっくんはきよとした顔で見つめていた。けれどそのうちに、みっくんはふう、とため息をついて、「わかったよ」とわたしの言葉を止めた。やれやれというふうな、だけどやさしい声で。

「普段はおどおどしてるのにさ、好きな本の話をするときはすこいおしゃべりなこと、昔と変わらないよね」

みっくんはそう言って、わたしの差し出した本を受けとった。みっくに本をわたしながら、わたしは自然と笑顔になっていた。ずつと変わりたいと思っていたはずなのに、わたしはみっくんの言葉が、なんだかとてもうれしかった。

(如月 かずさ「マーボー豆腐」より)

問一 線①～④のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 線①～④にはみっくんの様子が描写されていますが、これらの描写からみっくんのどのような心の中が見て取れますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 「わたし」に自分の動揺を悟られないようにしている。
- イ 「わたし」がいつまでも子どもっぽいことを言っているのだからにしている。
- ウ 「わたし」のあまりの勢いに根負けしている。
- エ 「わたし」の反応を見て「しまった」と思い、気を遣っている。

問三 線A～Fには「わたし」の行動が描写されていますが、これらの描写

あきらめられないで、こわごわその顔色をうかがおうとしていると、みっくんがぼそぼそとつけくわえた。

「だいたい、こんなでつかいのが低学年向けの童話なんて読んでたら、変に決まっているだろ」

その言葉を聞いたわたしは、はつとしてみっくんの顔を見あげた。わたしよりも頭ひとつぶんは上にある、みっくんの顔を。

ふてくされたような顔でそっぽを向いているみっくんを見て、わたしは気がついた。みっくんは、童話を好きじゃなくなったわけじゃなかったんだ、って。そのことが、みっくんの声や表情から伝わってきた。

それからわたしは、美貴ちゃんの言葉を思い出した。大人っぽいふりをしていたわたしは、不機嫌そうに怒っているように見えた、と美貴ちゃんは言っていた。不機嫌そうに怒っているように見えるって、それはわたしだけじゃなくて、みっくんもそうだ。

もしかしたらみっくんも、わたしがそうだったように、急いで大人になろうとして、無理をしているんじゃないだろうか。わたしと違って、みっくんの外見はどんな大人に近づいている。だからわたしよりも余計にあせって、大きくなった体にも身もあわせようと、大人っぽく振舞って、好きな童話も読まなくなって……。

変わらなくちゃとあせっていたのは、わたしだけじゃなかった。そのことがわかったとたん、わたしの口から言葉が飛びだしていた。

「絶対、 と思う！」

静かな図書館に、わたしの声が響きわたった。みっくんは目をまるくして、わたしも自分の声の大きさにうろたえていた。

なにを話したらいいかわからなくて、おろおろしてしまっただけで、わたしはとにかくみっくに、またポックルの童話を読んでほしかった。

「あ、あのねっ、この本、ほんとにすこおもしろかったの。ポックルの全部のお話のなかで、ベストスリーに入れたいくらいに。ライバルのイナリ丸との料理対決

から「わたし」のどのような心の中が見て取れますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 大人らしく振舞おうと精一杯努力している。
- イ どうしてもみっくに伝えたいことがあって必死になっている。
- ウ 小学校のころのみっくんとは違う反応に驚いている。
- エ 今までの迷いがふっきれて自信を持って前に踏みだそうとしている。
- オ このままでは大人になれないのではないかと迷っている。
- カ みっくんのことで頭の中が混乱して、しよんぼりしている。

問四 線(1)「まるでいつまでも終わってくれない劇の舞台で演技をしているような気分だった」とありますが、これはどのような気持ちをととえていますか。くわしく説明しなさい。

問五 線(2)「みっくんが怒った顔で振りかえった」とありますが、この時のみっくんの気持ちを説明したものとして適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 昔のあだ名で呼ばれ、子ども扱いされて腹が立っている。
- イ 童話を読んでいたのを見られてしまい気まずい思いをしている。
- ウ 久しぶりに楽しく童話を読んでいたのに邪魔されて不愉快になっている。
- エ 知らんぷりして立ち去ろうとしていたのに強引にすそをつかまれて困惑している。

問六 線(3)「童話を好きじゃなくなったわけじゃなかったんだ」とありますが、直前のみっくんの言葉や、ふてくされたような顔でそっぽを向いている表情から、「わたし」はどのようなことに気づいたのですか。説明しなさい。

問七 に入る台詞は、その前のみっくんの台詞()線「だいたい、こんなでつかいのが低学年向けの童話なんて読んでたら、変に決まっているだろ」に対する「わたし」の応答になっています。「わたし」がどのよ

うに応答したのかを考えて、

に台詞を入れなさい。

問八 — 線(4)「ずっと変わりたいたいと思つていたはずなのに、わたしはみつくんの言葉が、なんだかとてもうれしかった」とありますが、「わたし」がうれしくなったのは、自分の中で悩んでいたことに対して答えが見えてきたからだと考えられます。どのようなことが見えてきたのですか。答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(問いの都合で途中本文を省略したところがあります)

【文章A】

言葉とは差異に根ざした表現である。

これは言語学の父と呼ばれるフェルディナン・ド・ソシュール(一八五七—一九一三)が、言葉が存在することの根本理由を明かしていくなかでたどりついた答えです。わかりやすい例をあげましょう。たとえばあなたが雪の積もった原野を旅していて、その雪面に対してなんらかの表現をこころみようとした時、どんな言葉が出てくるでしょうか。思いつくところで、「白い」「冷たそう」「かたそう」「まぶしい」といったところではないでしょうか。しかし、雪とともに暮らすイヌイットには、その表層の呼び方だけで幾十もの言葉があると言われています。なぜなら彼らは、雪質や気温や風によつて微妙に変わる雪原の見え方、その区別がつくからです。

(1) a 区別がつく。そこに差異がある。だから言葉が生まれるのです。

b

日本には、雨に対する呼び名がたくさんありますね。「霧雨」「こぬか雨」「にわか雨」「五月雨」「お天気雨」「夕立」「通り雨」「ゲリラ豪雨」といったふうです。雨が多く、四季に恵まれた国土だけに、ボクらはその区別がつくのです。だからこれだけの呼び名が生まれました。では、欧米ではどうでしょう。たとえばカリフォルニアやニューメキシコで「雨の表現はいくつありますか?」と訊いても、それはあまり意味をなさない問いになるはず。まったくもって、あちらでは雨は雨でしかありません。せいぜいが「ヘヴィー・レイン(激しい雨)」「や」「シャワー(にわか雨)」といったテイ。言い方はありますが、雨に対する細分化がない土地では、その言葉数もぐっと減るのです。

では、差異は初めから対象に用意されているものなのでしょうか。

そうだとも言えるし、そうではないとも言えそうです。これもまた、ボクらの内側

が「差異がある」と、とらえられるかどうかにかかっているようなのです。

たとえば、並木を考えてみて下さい。あなたの家のそばにも並木がありますよね。ケヤキやサクラのように、樹木の名ぐらいはあなたにもわかると思います。でも、それ以上のことになるとどうでしょう。あなたは毎朝、何本の木に出会いますか? そのそれぞれの区別がわかりますか? たとえば並木の一本だけを取り出したとして、それがどこに植えられていた木なのかわかるでしょうか。

おそらくは「いいえ」という答えが返ってくるでしょう。並木全体は認識できても、その一本ずつは区別してはいけません。すべての木は形が違つのに、差異をとらえられていない。物体としての分け隔てがないのです。独立してはいない。だから一本ずつに対しては呼び名もない。

しかし、これが並木ではなく、人間だったらどうでしょう。木の代わりに人が立っていたら? いえ、そこまで考えなくても、入学や転校で新しい仲間たちと出会った時のことを思い出して下さい。何十人、あるいは何百人もの新しい仲間たちが現われた時、最初はだれがだれだと区別がつかみませんから、当然、名前も覚えられません。しかし、数ヶ月もすれば、すくなくともクラス全員の名前ぐらいはわかるようになるものです。それは等しく、全員の差異がわかるようになったからとも言えるのです。

周囲のものや事象、それぞれに対する差異の発見。それが形状からくるものであれ、性質からくるものであれ、言葉がタンジョウしたのはまさにその部分からです。一見、言葉はものへの「対応」にその由来を持つていそうなイメージですが、もともと根本的なところは認識上の「違い」であり「差異」であつたのです。

ところで、ボクらはどういふシステムでひとつひとつの言葉をキユウシユウし、それ

を自分の表現の道具として話したり書いたりできるようになったのでしょうか。たとえば、モンシロチョウという蝶の名前を覚えた時、いったいボクらにはなにが起きたのでしょうか。

ほとんどの人は幼児の頃、その蝶が飛んでいくのを見て指をさし、「ああ……」と声をあげたところで、親や親戚のおじさんなどが「あれはモンシロチョウというんだよ」

と教えてくれたのだと思います。目の前をひらひら飛んでいく白い蝶。大きなアゲハチヨウや黄色のモンキチョウとはあきらかに違う生き物です。ここで、目でとらえたモンシロチョウと、差異を示すために与えられたモンシロチョウという名詞が合体し、ひとつの存在として認識されていくようになります。

では、大人たちが蝶に対していつさいの興味を持たず、幼児がモンシロチョウを指さしてもなにも言ってくれなかった場合はどうでしょう。

おそらく、この子がモンシロチョウという蝶の名前を覚えるのはもうすこしあとになります。しかし、たいていは友達などが教えてくれて、目でとらえた差異とそれを示す名詞の合体という同じ反応が起きるのです。ただ、時にはこんな例も考えられます。それは友達どうしの会話のなかで、モンシロチョウという名詞が先に出てきて、本人がその実体をつかめない場合です。素直に、「モンシロチョウってなに?」と訊ける人ならば、次は蝶が飛んでいる時に友達に教えてくれるかもしれません。名詞が先に記憶に残り、あとで差異を理解するという経験です。

では、他人に尋ねる勇気がこの子になく、「モンシロチョウってなんだろう? 今さら訊けないし」と胸のなかに疑問をしまいこんでしまった場合はどうでしょう? この子は家に帰ってから図鑑を広げたり、ネットで調べたりするかもしれませんが、そのこの独自の経験を通じて想像をふくらませ、ひよつとして春になるとひらひら飛んでいるあの小さな白い蝶のことなのか、とイメージの上での差異と名詞を結び付けるのです。どの言葉の覚え方が正しい、ということではありません。ボクがここで言いたいことは言葉の覚え方にはいくつものパターンがあるということなのです。

(ドリアン助川『フチ革命 言葉の森を育てよう』にもとづく)

問一 線①～③のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 線①～③について次の問いに答えなさい。

- ①「せいぜい」をことと同じ意味で正しく使っている文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア せいぜい努力して下さい。

イ 片付けてせいぜいした。

ウ 食料がせいぜいもって二日だ。

エ せいぜいから心がける。

- ②「その部分」は何を指しますか。答えなさい。

ア 道がくねくね曲がる。

イ 雨がざあざあ降る。

ウ 犬がわんわん鳴く。

エ だんだん暖かくなる。

イ 片付けてせいぜいした。

ウ 犬がわんわん鳴く。

エ だんだん暖かくなる。

問三 線a～dのうち、線③「言葉はものへの『対応』にその由来を

持っている」の意味の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号

で答えなさい。

ア 線a「言葉とは差異に根ざした表現である」と同じ意味である。

イ 線b「区別がつく。そこに差異がある。だから言葉が生まれるの

です」と同じ意味である。

ウ 線c「差異は初めから対象に用意されている」ので、それに名前

をつけた表現が当てられたりすることで言葉が生まれるという意味で

ある。

エ 線d「ボクらの内側が『差異がある』と、とらえ」た対象に対し

てそれぞれ名前をつけた表現が当てられたりすることで言葉が生まれる

のである。

エ モンシロチョウという名詞だけ知って、調べたり想像したりするだ

けで実際の蝶を見たことがなければ、言葉を覚えたことにはならな

い。

オ モンシロチョウという名詞を先に知り、後から現実の蝶を見て教わ

るような言葉の覚え方も、実体験と名詞が合体しているには違いな

い。

イ。 本文中に続いて筆者は、意識的に自分を変える「プチ(小さな)革命」として自分

の中にある言葉を増やすことを提案します。それは、何であれ興味を持ったもの

にかかわる名詞をとにかくすべて覚えていくというやり方です。

【文章B】を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章B】

ボクらの胸にある言葉の森は、さまざまな経験によって一本ずつ木々が増え、徐

々に大きくなってきたものです。

プチ革命は、この言葉の森に、あえて自分で選んだ一本の木を植えてみるという

行為が始まりとなります。

すこし前になりますが、朝日新聞全国版夕刊に、ボクのエッセイが掲載されまし

た。

(1) 言葉はあなたを助ける。言の葉が寄り集まって森になる時、そこから柔らかな

な風が吹き始め、あなたの背中を押してくれるからだ。その先にはあなたの進

む道がある。

たとえば、ある日あなたが偶然訪れたベトナムレストランで、フオーと呼ばれる

麺を初めて味わったとします。それが実においしい。スープもやさしくしみわた

り、体が癒される。これは自分に合う。ひよっとしたら、こんな麺料理を生み出す

国民性は自分と相性が合うのではないか。続けてあなたはこんなふうを思いま

す。

問四 線(1)「区別がつく。そこに差異がある。だから言葉が生まれるのです」と

ありますが、どのように区別がつくことで、どのように言葉が生まれるのかを、子

どもが成長のなかで言葉を増やしていくことにはあてはめて具体例を一つ挙げ、説

明しなさい。(本文にない例を自分で考えること)

問五 線(2)「ボクらの内側が『差異がある』と、とらえられるかどうかにかか

っている」とありますが、これに続く本文を読んで次に挙げる短歌の内容を考え、

【 】にあてはまるように答えなさい。

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日 (俵万智)

並木のすべての木を一本ずつ区別することはほとんど考えにくい、

中の一本に特別な思い入れがあつてその人だけの呼び名をつけ他の木と

区別することはあり得る。それと同じように、この短歌は【 】と

いうことを歌っている。

問六 次のア～オについて、本文の内容にあてはまるものには○を、そうでないもの

には×を、それぞれ答えなさい。

ア 使える言葉の数はその人の心の豊かさの表れだから、三万語を知っ

ている人は二万語を知っている人より心が優れ、四万語を知ってい

る人はもつと心が優れている。

イ クラスの仲間は見知らぬ人の集まりとは違うので、ただ名前を覚え

るだけでなく、一人一人と深く関わり個性を理解していかなければなら

ない。

ウ モンシロチョウを見たとき、名前をその場で教わるのとはばらばら

ってから教わるのとは、実体験に名詞が合体するという点では同じ

である。

エ モンシロチョウという名詞だけ知って、調べたり想像したりするだ

けで実際の蝶を見たことがなければ、言葉を覚えたことにはならな

い。

オ モンシロチョウという名詞を先に知り、後から現実の蝶を見て教わ

るような言葉の覚え方も、実体験と名詞が合体しているには違いな

い。

イ。 本文中に続いて筆者は、意識的に自分を変える「プチ(小さな)革命」として自分

の中にある言葉を増やすことを提案します。それは、何であれ興味を持ったもの

にかかわる名詞をとにかくすべて覚えていくというやり方です。

【文章B】を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章B】

あなたの情熱によって植樹された言葉の森にはそれだけの力が宿ります。新しく

植えられた木はひとつの生命として小さな森をつくらうとし、次々に仲間の木を呼

びこみます。芽生えが続き、葉っぱもどんどん繁茂していきます。

そしてこれらの言葉の葉っぱたちは、あなたの生活上の体験を欲するようになり

ます。言葉として一人前になるうとするためにです。モンシロチョウという言葉

を知ってしまった人は、それを食べてみたいと思うものです。実際に味わうことによ

って、バインセオという名詞が胸のなかで本物の言葉に昇華するからです。

無意識という受け身の姿勢ではなく、試験勉強のように強制的でもなく、自分が

好きだからこそコレクションしていく言葉たち。これらが、いきいきとした本物の

言葉になるうとして、あなたの人生さえも動かし始めるのです。言葉の森から吹く

やわらかな風。あなたの背中を押してくれる風。それはまさにこの力のことです。

(2) 【 】と願うように、バインセオというベトナムのお好み焼きの名を

知ってしまった人は、それを食べてみたいと思うものです。実際に味わうことによ

って、バインセオという名詞が胸のなかで本物の言葉に昇華するからです。

無意識という受け身の姿勢ではなく、試験勉強のように強制的でもなく、自分が

好きだからこそコレクションしていく言葉たち。これらが、いきいきとした本物の

言葉になるうとして、あなたの人生さえも動かし始めるのです。言葉の森から吹く

やわらかな風。あなたの背中を押してくれる風。それはまさにこの力のことです。

1 線(1)「言葉はあなたを助ける。言の葉が寄り集まって森になる時、そこか

ら柔らかな風が吹き始め、あなたの背中を押してくれるからだ」とありますが、

言葉があなたに何をうながすようになるのですか。次の【 】に入る

ことばとして最も適切なものを【文章B】の文中から六文字で抜き出しなさい。

をうながす

2

(2)

に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で

答えなさい。

ア ひらひらと飛ぶ実物を見たときに教えてほしい

イ ひらひらと飛ぶ実物を見たとき教えてもらえず、いつか知りたい

ウ 実物を見るより先に知った子がひらひらと飛ぶ実物を見たい

3

【文章B】の内容を筆者が「フチ革命」と言って提案する理由として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 受け身の姿勢で教えられる言葉や強制的に覚えさせられる言葉ばかりで、きている言葉の森には、私たちの進む道を示し背中を押すような力はないから。

イ 自分が好きで覚える言葉の数々は、その人の言葉の森全体からすればほんの小さな部分に過ぎなくても、他の言葉とは区別され特別な核かくを形作るから。

ウ 興味を持った対象にかかわるすべての名詞を覚えることさえできれば、それを完全に自分のものにしたことになり、自分の世界を格段に広げられるから。

エ 興味を持った対象にかかわる名詞のコレクションは私たちに自発的な活動をもたらし、私たちが自信や責任感をもって人生を歩むことにつながるから。

